

認知的動機づけ理論にもとづく高等学校家庭科調理実習の実証的研究

教育実践高度化専攻
授業実践リーダーコース

P08033G

牧田 利枝

I. 問題の所在と研究の目的

社会的要請が高まる「学力向上」を支える「自ら学ぶ意欲」は昨今の「動機づけ」研究のなかで論じられており、学習意欲を高めるには日常的な課題を与え、学習の意義を実感するような指導が求められている。また、見通しを持って、粘り強く課題に取り組むような持続的な動機づけを考えると、時間軸の長さがまったく異なる「学ぶ意欲」と「生きる力」を繋げていくのが家庭科である。「将来の家庭人、生活者としての主体」を育てる教科「家庭」を抜きにして、「学ぶ意欲」と「生きる力」を同時に語ることはできない。

本研究は巷で熱く語られる学力向上や学力観の影の部分で生徒が学習の主体者として家庭科調理実習で学ぶ姿を「動機づけ」の視座で検証することを目的としている。また、教師にとっての授業改善においては「調理実習における学習意欲の向上を図る」という切り口で論じてみるものである。

II. 研究の方法

目標理論は、Atkinson(1958)の期待×価値理論の期待についての発展的理論であり、目標に準拠した評価が依拠する理論である。目標に準拠した評価では、「めざす姿」(行動目標)として、到達規準を設定し、ループリックによって評価基準を明確にし、教育評価がなされている。しかし、「意欲・関心・態度」のような情意面の「見えにくい学力」は、行動目標として表すことに適さず、評価しにくいという問題が指摘されている。本研究では、学力向上につながる「意欲」をどの様にみとることができるかという根本的課題を学習の意義認知という認知的な動機づけ理論を検討す

ることから着手している。そして、調理実習に強く関連している興味(内発的動機づけ)、自己決定論等にもとづいた研究デザインを構想した。

1年目は高等学校家庭科における実習—実習以外の学習における価値づけを調査し、「役立ち感」「有用感」を高めることで調理実習の意義を認知させ、価値の内在化を促すことで意欲向上が期待できるという仮説をたてた。2年目はこの仮説にもとづき、自己評価と組み合わせる「意義認知ワークシート」を開発し、その効果を検証した。3年目は「意義認知ワークシート」を改良し、調理実習の意欲を高める「意義認知ツール」としての生徒の記述活動を構造化しその全体像としての授業デザインに取り組んだ。

III. 家庭科学習(実習—実習以外)の学習意欲、価値づけに関する調査結果

達成動機づけ研究における期待×価値モデルとして、Wigfield & Eccles(2000)の「主観的課題価値(subjective task value)」をもとに、本校生徒(3年生)対象に調査した。実技テスト、定期テストのような教科学習の達成価値領域に強い反応がみられた。特に、実習をできるようにになりたい、と実習に対する達成価値に強い反応がみられた。また、家庭科は生活上必要な知識を身につけるのに、役に立つといった有効価値を付与しており、一方、大学受験や出世するためといった功利的な有効価値の付与は弱い。また、生徒の家庭科の学習意欲は実習と実習以外の勉強では実習のほうが有意に高く、その内容は、「実習が好きだ」という内発的価値づけが強く付与され、「実習はやればできると思う、実習ではわからないことがあっても、あきらめないで頑張ろうと思う」

という態度形成につながる学習意欲が高いことが確認できた。

さらに、因子分析の結果、4つの因子を抽出し、それぞれの因子は「実習以外の学習」、「実習」、「価値づけ（役立ち、重要性）」、「コスト」と考えられた。「内発的興味（内発的価値）」と「有効価値（utility value）」の境界が曖昧であり、「実習以外の学習」と「実習」とを分けていない質問に対してはこの2つを同様に価値づけていると考えられ、「役立ち」「有用性」といったものが、内発的動機づけの源泉である、重要さ（価値）と同義であることが推測された。また、行動コストの知覚に配慮し、家庭科の学習の価値を「生活上必要な知識」であると内在化することが行動レベルでのネガティブな要因を低減できることが示唆された。

以上のことから、「意義認知」を踏まえて、内発的興味や達成動機づけにみられる有能さへの欲求が動機づけの源泉として初発の段階で働くとともに学級環境の中で自己決定が支援される様な関係性に配慮した授業デザインが有効であることがわかった。

IV. 「意義認知ツール」の開発と効果

認知的動機づけ理論では学習者が学習の価値や意義を認知することで学習意欲が向上するとしている。また、価値の「内在化」とは、おもに学習の（社会的）価値を自分のものにすることであり、特に嫌なことをするとき（外発的に動機づけられているとき）に機能し、認知心理学においては自己調整ともいう。

今回開発した「意義認知ワークシート」はシラバスを共有化し、生徒が調理実習の自己目標の設定をし、生徒自身が評価活動に参加している感覚を持つことを意図した。評価の目標や基準を関係的に創り出し、更新し続けるのが理想であるが、実践では目標分析によって単元指導の構造を明確にし、指導計画に反映させることで、このようなプロセスを創出し学習意欲の喚起を目指した。

09年度開発・実施した「意義認知ワークシート」については、生徒の記述内容とインタビューで効果を検証した結果、意義認知することで学習意欲

が向上することがおおむね確認できたものの、次のような課題がみえてきた。①「取り入れ」による調整であるため、学習の価値づけ（重要性）に関連づけた自己目標が立てられない。②概念的な言葉の理解が不得手なため、自分の考えを記述することが難しい。一方、インタビューでの会話の中で、生徒の省察が促進された。③外発的動機づけの段階で適応的に「努力」を意識的に用いていることで「頑張った」と自己評価している。

10年度は「意義認知ワークシート」を簡略し、自己評価能力の形成と組み合わせて「意義認知ツール」の構造化し授業デザインの全体像を見直した。短時間で生徒の達成・未達成のセルフチェックをさせることにより意義認知を促し、意欲を育むことと評定への運用を目指した。

09年度と10年度の「授業評価（自己評価）」をそれぞれクラスター分析し、比較した結果、どちらも「理解—積極性」の強いクラスターが認められた。さらに、「授業規律」は09年度では協調性や公共心とは独立しており、教師が行う提出物や忘れ物チェックといった外的な統制の影響をうけていたが、10年度は「授業規律」が「協調性—公共心」と同一クラスターとみなすことができたことから、自己統制的で関係性依存的な学習態度が形成されたといえる。

これらの結果と評定資料としての運用を検討したところ、構造化された「意義認知ツール」を使用した授業デザインが、生徒が調理実習を自律的に学習するように働きかけていることが示唆された。

V. まとめ

調理実習で育まれた意欲は「知識・技能」の領域や教科の枠を超えて、「思考・判断・表現」といった活用型学力を育むための原動力となる。高等学校において調理実習で学ぶ意義は「できる/できない」を超えた有能感を育て、自己決定的に目標を修正しながら自律的に学習を進めていくような仕組みにあるといえる。

主任指導教員 黒岩 督
指導教員 永田 智子